

長崎の地縁・人の縁

田中 正和 陸士60

この年になって、色々思い出すことが多くなった。特に多くの人と知り合いになり、人生を楽しませていただいた気がする。特に、島原生まれの私にとつて、長崎の人々との思い出は、人との繋がりと縁、そして地縁の有難さを痛感している。

長崎の地縁・人の縁で最初に思い出すのが、山口叡さん（陸士56）である。

昨年『偕行』9月号の本誌に続き、花だよりを見る。先輩期の記事にも丹念に目を通す。陸士56期は山口叡さんが何時も編集担当として励んでおられたことを知っていたのに、本号にお名前がない。怪訝な気持ちで読み進めると、なんと訃報（7月）が掲載されているではないか。びっくりした。信州安曇野にお住いの長女水谷さよさんに電話した。5月頃から体調を崩しておられた由、「子供や孫に看取られ、苦しまず、安らかに旅立ちました。93歳でした」と。数か月前、偕行社でお目にかかったことが最後となった。

実は私と山口さんとは、娘同士が高校のクラスメートだった縁で数年前から

ら懇意にしていた。偕行社談話室がまだ2階にあった頃、「田中、56期の山口さんが君を探しておられるよ」との言伝で急に2階に降りて初見参した。その後お目にかかるのは偕行社だけであったが、お目にかかるたびにやさしく、接していただいた。

山口さんは東幼41期、ご出身も私と同じ長崎県とあってごく親しくしていただいた。札幌の故松本義則君（おなじ長崎県諫早出身）からも「自衛隊で山口さんの下で働いた。いい方だったよ」と聞いていた。この松本君は終戦直後、故水谷勝人区隊長の下で復員業務についていたそうである。

二人目が、偕行社会長志摩篤氏である。志摩会長は、長崎県大村高校ご出身、私は田舎の島原中学出身で郷里が近いというところで親しくさせていただいている。昨年暮れには、志摩さんの女婿、武蔵野音楽大学北原幸男教授指揮の大声曲、海道東征（北原白秋作詞、信時潔作曲、紀元二千六百年奉祝讃歌）の川崎シンフォニーホールでの公演を聴きに行った。印象に残る感動のひと時だった。

志摩さんのクラスメートの女性に、前出56期山口叡さんの妹、現子さんと、同期吉村一誠君（昨年9月6日死去）夫人順子さんがおられた。志摩さん曰く「現子は私のことをよく

知っているんですよ。兄貴の山口さんから聞いているらしい」だった。吉村夫人順子さんは、大先輩50期の曲寿郎さん（長崎県ご出身）の姪御さんであり、曲さんは陸軍長退官後裁判官、その後は弁護士をされていた。

十年程前、私の隣の訓育班の生徒監だった同期の平山隆三さん（三光汽船専務、お父上は大正天皇が皇太子時代ののお付武官）のお通夜に参列されていた。同夜は息女が会社員時代の私の部下と結婚、結婚式にお招きに与かり、ご挨拶もしていた川名隆夫さんもお見えた。川名さんは東幼45期と48期の生徒監をされた方。曲さんは平成24年に95才で、川名さんは同27年に98才でご逝去、天寿を全うされた。

さらに、今『偕行』本誌に連載中の「青壮日記」の筆者である岡田慶治氏（陸士43）は、私が広幼に入校する際の保証人である。

「青壮日記」はオランダ軍事法廷で法務死された岡田少佐の遺稿であるが、夫人の久子様は大村ご出身、岡田少佐が大村歩兵第46聯隊に勤務中、海水浴でよく見かけられていた由で、後日満洲守備隊時代に求婚されたところ。丁度今その場面（4月号）が記述されている。

私と少佐との関係やエピソードについては昨年の花だより2月号60期に掲載された。

大村の聯隊は、地元の壮丁が入営する聯隊、私も昭和16年1月、陸幼の学科試験を大村で受けたし、子供のころから馴染んで来た街だ。昭和50年代、教え子の広幼43期の方々が、大村で少佐のご遺族を招かれて法要を催されたときは、私も特別に参列させていただいた。少佐お眠りのお寺での法要の後、お斎の場所は少佐が少・中尉の独身時代のお馴染、浜田屋旅館だった。

なお名越二荒之助先生編の『昭和の戦争記念館』第5巻64頁に、少佐について軍事法廷の裁判長が「岡田ほど堂々と戦ったものは一人もいなかった」と言わしめたことあり、大尉時代の「一家の写真も掲載されている。当時38才、今してみれば、若いのにまさに武士道を実践されたものと、敬仰してやまない方だ。」

名越先生に師事していた広幼47期花だより担当、奈良保男君も大村出身、菩提寺は岡田少佐と一緒にしたこと。岡田少佐の三女山崎玲子さんと懇意で、少佐のご遺稿五編をお預かりしていた。私は今も、島原に帰郷するときは大村の長崎空港を利用しており、愛着は一人だ。

改めて、故郷、長崎の地縁・人の縁に感謝して、お蔭さまの心で日々を過ごしたいと思う。